

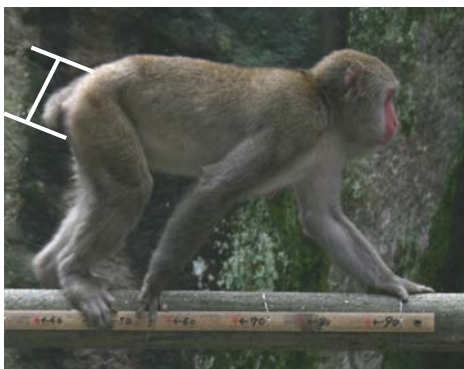
アカゲザルとニホンザルとの交雑個体の判別方法に関する知見

■相対尾長（頭胴長もしくは座高に対する尾長の割合）

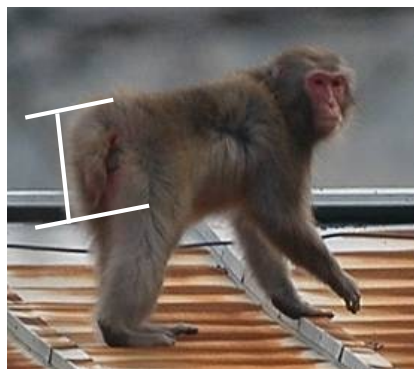
- Fooden, 2000 によると、ニホンザルとアカゲザルの間で最も顕著な種差は相対尾長であり、ニホンザルでは 15%、アカゲザル東方グループ（中国を中心とする地域）では約 30%、西方グループ（インドを中心とする地域）では約 45%である。
- 京都大学霊長類研究所で飼育している中国とインド由来のアカゲザルの平均尾長は、中国アカゲザルは、オスで 37.80% (SD4.31)、メスで 36.52% (SD 2.85)、インドアカゲザルは、オス 46.08% (SD4.06)、メス 44.19% (SD4.91) である。
- 相対尾長の頻度分布の頻度のピークは、ニホンザルでは 15-20%クラス、中国アカゲザルでは 35-40%、インドアカゲザルでは 40-45%クラスで、いずれも最頻クラスが約 50%を占めた。房総のアカゲザルと交雑個体の頻度分布のピークは 35-40%クラスにある。

■体色

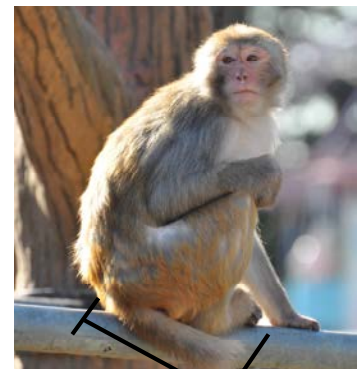
- 千葉県で野生化し交雑個体の混ざるアカゲザル個体群のサルは、ニホンザルより尾が長く、下半身の黄色味（あるいは赤味）が強いアカゲザルの特徴がみられる個体が多い。
- アカゲザルは上半身と下半身の間で体色のコントラストが顕著。上半身が灰褐色で、下半身の腰と大腿部は鮮やかな橙色。
- ニホンザルでは、それほどのコントラストは無く、腰と大腿部の体色は鮮やかではない。
- デジタルカラーアナライザーで計測した背と大腿外側面での黄-青色度コントラストの頻度分布を比較すると、房総のアカゲザルと交雑個体は、アカゲザルとニホンザルの中間にある。



ニホンザル（提供：大分市教育委員会）



千葉県ニホンザル個体群の交雑判定済みのオトナメス（撮影：白鳥大祐氏）



アカゲザル

【引用・参考文献】

大井徹・川村正二ほか（2013）千葉県の外来種アカゲザル問題を考える．講演1．白井啓 千葉アカゲザル問題の概要位置づけ．霊長類研究, 29(2):138-142.

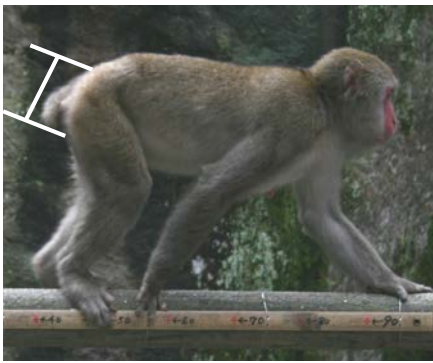
大井徹・川村正二ほか（2013）千葉県の外来種アカゲザル問題を考える．講演3．濱田穰 アカゲザルとニホンザルの交雑個体を形態学的指標に基づく判定．霊長類研究, 29(2):146-151.

Fooden J(2000)Systematic review of the rhesus macaque, *Macaca mulatta* (Zimmermann, 1780), Fieldiana Zoology, 96 : 1-180.

台湾ザルとニホンザルとの交雑個体の判別方法に関する知見

■ 相対尾長（頭胴長もしくは座高に対する尾長の割合）による判別

- Fooden, 2000 によると、台湾ザルの相対尾長は 80%、ニホンザルは 15% である。
- 和歌山県のニホンザルと台湾ザルの交雑個体では、年齢による短縮を補正した相対尾長は、16%（最小）から 85.8%（最大）の変異を示した。用いた 325 個体データの相対尾長の平均値は 43.6%、Median=42.1%であった。
- 台湾ザルとニホンザルの交雑の場合、交雑度と相対尾長の間に関係性が認められ (hamada et al., 2012)、子は両親の尾長のおおよそ中間の長さの尾をもつ傾向がある。
- 相対尾長は加齢に伴って減少することが知られているが、和歌山県で調査された台湾ザル個体群の駆除個体の尾長・尾椎数の平均値は純粋台湾ザルと純粋ニホンザルの中間値に近い。



ニホンザル（提供：大分市教育委員会）



ニホンザルと台湾ザルの交雑個体
（提供：和歌山タワンザルワーキンググループ）



台湾ザル

【引用・参考文献】

濱田譲・毛利俊雄ほか（2008）和歌山県における台湾ザルとニホンザル交雑に関する形態学的検討Ⅰ：尾長・尾椎数と交雑度の関係。生物多様性への移入種の影響：和歌山のタワンザル交雑群に関する総合的研究, pp. 9-39.

大井徹・川村正二ほか（2013）千葉県の外來種アカゲザル問題を考える。講演3. 濱田譲 アカゲザルとニホンザルの交雑個体を形態学的指標に基づく判定。霊長類研究, 29(2):146-151.

Fooden J(2000)Systematic review of the rhesus macaque, *Macaca mulatta* (Zimmermann, 1780), Fieldiana Zoology, 96 : 1-180.